
シスターズパニック！？

カイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シスターズパニック！？

【Nコード】

N9736V

【作者名】

カイト

【あらすじ】

両親が仕事の都合で海外に行っちゃった！？
家には姉と妹と俺しかいないという状況・・・
しかも！！俺と姉妹たちは血がつながってない・・・って！？
それを知ってるのか知らないのか妙にアタックしてくる姉妹たち
それにつられて、幼馴染やクラスメイトまで俺にアプローチを始める
「俺ってそんなにモテたっけ？」こんなこと相談する奴がいなし
てか、クラスの男子にかなり恨まれてる気もするし・・・

そんな俺の苦勞を知らない姉妹との波乱万丈の生活が始まる

第1章 海外赴任（前書き）

両親がいきなり海外に仕事に行つちまった！！

家に残つたのは、俺、結城寛樹と双子の姉たちに双子の妹達さらに末の妹・・・って！？おい！！女だらけじゃないか！？

「俺・・・大丈夫かな・・・」

第1章 海外赴任

「・・・なあ、恋姉」なぜか人のベッドに入りこんで人の腕を取って逃がさないようにしている姉に聞いてみる

「なあに？」まるで、なにも知らないと言いたげな表情をして聞く

「なんで、俺のベッドに入ってるんだ？」とりあえず、姉に取られている腕を動かそうとしてみるけど姉のふくよかな胸に挟まれていて取れない

「うふふ、あら寛ちゃんてば小さいときは恋姉ちゃんって甘えてきたのに・・・」

「・・・いつの話だ・・・たく、てか恋姉、朝飯抜きになるけどいいの？」

「それはダメね・・・寂しいけどしょうがないわね。じゃあ、寛ちゃんお願いね」言うなりすつと俺の部屋から出ていく

「・・・朝から疲れる・・・鈴姉もくるんじゃないか・・・いや、朱里と雛里もありえる・・・梓も可能性はあるな」

おっと、自己紹介がまだだった俺は「結城寛樹」19の大学1年だ、んで、さつき来ていたのが双子の姉で「結城華恋」21の大学3年

「って俺は誰にいつてるんだか、時間は7時ちよい前か・・・今日は俺と恋姉に鈴姉は大学は休みで、朱里と雛里と梓は中学つと」
着替えを済まし、洗面台に行き見出しを整える

「はあ・・・親父はいいとして、なんで母さんまで海外にこれじやあ俺に家事をやれって言ってるじゃんか」ため息をつきながら、キッチンに向かう

「あれ、鈴姉今朝は早いじゃんか」ソファに座っていた姉を見てと

りあえず目のやり場に困っていた裸Yシャツって一体どういう格好で寝てんだか

「あつ、寛くおはよ？コーヒー入れてくれるよね？」 突然、寛樹に抱きつき耳元でささやく

「・・・いい加減なれたが、まず離してくれそれから服を着る」
昔は鈴姉のあの格好を見れなかったからな

「じゃあ、「鈴姉ちゃんだあ〜いすき」って言って〜」

「・・・コーヒー入れないぞ・・・」 静かに言う

「むう〜しようがないな・・・離れたからコーヒー入れてね」 寛樹から離れる

「・・・ほらよ」 鈴姉が愛用しているマグカップにコーヒーを淹れる
ガチャ・・・「ふあああ・・・お兄ちゃんおはよ〜むにゃむにゃ」

リビングにツインテールの子が入ってくる
「おはよ、梓。朱里と雛里は？」 キッチンに戻り朝食の準備を始める

「恋お姉ちゃんのお手伝いしてるよお〜ふあああ」 あくびをしながら自分のマグカップにコーヒーを淹れて更にコーヒーミルクと砂糖を入れる甘党だからかなりの量が入る

「そうか、ほら鈴姉も働く」 言葉で姉を促す
「えええ〜私？私の担当はカウンターなんだからね」 Yシャツのボタンを2つ離す

「・・・鈴姉、朝食がなくなるかいますぐ着替えるかどっちがいい？」 目が笑ってない笑顔で聞く

「着替えてこよつと・・・」 そそくさと自分の部屋に戻る
「ったく・・・なんか親父たちが海外に行ってから恋姉と鈴姉が妙に積極的になつたな・・・」 ぶつぶつと言う

「それはね、恋お姉ちゃんも鈴お姉ちゃんも朱里ちゃんも雛里ちゃんももちろん私もお兄ちゃんのこと大好きだかね」

「まあ、それは知ってるけど・・・」

「まあ、それは知ってるけど・・・」

「まあ、それは知ってるけど・・・」

「・・・皆、お兄ちゃんと兄妹（姉弟）以上の関係になりたいから頑張ってるんだけどね・・・」 小声でささやく

「ん？梓、何か言ったか？」 思わず聞き返す

「うん。なんでもないよぉ」 笑顔で寛樹も見つめる

「そっか。じゃあ、朝食をテーブルに運ぶの手伝ってくれるか？」

「うんっ！！」 元気よく返事をして料理の盛られた皿をテーブルに運ぶ

つと、また一様紹介しておくか、さつき裸Yシャツでいたのが双子の姉（妹）「結城華鈴」21の大学3年そして今、俺を手伝ってくれてるのが末の妹「結城梓」13の中学2年

「つて、また俺は一人で何言ってるんだか」

「梓、恋姉たちを呼んできてくれないか？」 残りの皿を運ぶ

「はぁい、お兄ちゃん学校から帰ってきたら勉強見てね」 元気よく返事をした後、リビングから調理場に行く

「・・・俺、大丈夫かな（理性保てるかな）」 箸を並べていく
ガチャ・・・「相変わらず寛の料理は凄いね」 着替えた華鈴が入ってくる

「皆そろつまで、食べるなよ」 毎朝のように釘を打っておく

「あはは、さすがにそこは待つよ」 食べたそうな顔をしながらじつと耐える

ガチャ・・・「お兄ちゃんおはよぉ」「おはよ」ショートカットの子とツインテールの子がリビングに入ってくる

「ああ、おはよ。朱里と雛里」

毎回言うのもなんだけど、こっちのショートカットの子が双子の妹（姉）「結城朱里」14の中学2年でこっちのツインテールの子が双子の妹「結城雛里」14の中学2年

「・・・」 いい加減ツツコミに疲れた

これで、俺の家族は全員かな・・・あつ！そういえば、家族みたいなのが二人いたなお隣の幼馴染で「天宮はるか」18の大学1年でもう一人は幼馴染で「姫宮小百合」19の大学1年

まあ、この二人はよく家に来てるから家族みたいなもんかな

「あら、私で最後かしら？」 華恋が最後にリビングに入ってくる

「さてと、食べるとするか」 両手を合わせる

「いただきます」 一斉に声を合わせて言う

数分後・・・

「それじゃ、私たちは学校に行ってくるね」 梓と朱里、雛里がゼ

ーラー服に着替えて学校に行く

「俺は後かたづけっとな・・・」 食器を流し台に持っていく

「私は、ケーキのデコレーションね」 更衣室に着替えに行く

「じゃあ、私は店内の掃除ね」 華恋に続いて更衣室に向かう

「のぞきに来てもいいからね？」 寛樹に対してウイソクをする華鈴

「頼まれてもいかねえよ・・・」 無視して食器を洗い始める

数分後・・・

「これで終わりっとな・・・」 最後の食器を洗い終わる

「・・・ふうく・・・俺はこの家族とは血が繋がってないんだよな・

・・・」 ソファに座ってため息を漏らす

あんまり話す気はしないけど・・・俺はもともと孤児だったんだよな、孤児院に保護もされずずっと一人で生きてきたんだよな。それで、ついに食べるものがなくなつたから死ぬんじゃないかって思っていたら、拾われたんだよな。恋姉と鈴姉に・・・あの頃はホントに俺は人が信じられなかつたし、嫌いだったんだよな・・・ふっ・・・

・そういえば、あの頃から変わってないな恋姉の優しさと鈴姉の誘惑・・・俺はいつまでここにいられるんだろうか・・・

それから、数時間後・・・

「・・・皆、いい？ルールを確認するわね」 何やら姉妹たちと幼馴染で一同華恋の部屋に集まって話をしている

「ええ」

「うん」

「・・・うん」

「うんっ！」

「はい」

「はい」

一方……

「なんか、盛り上がってるみたいだけど……いいか」 とりあえず書きかけのラノベをやる寛樹

一方……

「それでは、寛樹ちゃん争奪戦のルール確認ね……」

1、なんでもあり2、他人の邪魔はほどほどならあり3、同盟は自由4、寛樹ちゃんの捕縛はなし

「皆、いいわね」 皆の顔を見ながら言う

「うん」 「一斉にうなづく」

そして、寛樹の知らないうちに女の男をかけた戦いが始まる……

「……俺のポジションってなんだろう」

第2章 親父のちから（前書き）

両親が海外赴任して早数カ月がたった・・・

姉妹達のアタックが少しおさまってきたと思っていたけどそれは、
違っていた！？

親父が言ったテレビでのコメントでさらなる混乱をうむことになる
なんて俺は知る術はなかった・・・

第2章 親父のちから

「・・・はあ！？何言ってるんだ！？」寛樹はテレビのニュースを見てかなり衝撃を受けていた

「ど・・・どうしたの！？寛」近くに座っていた華鈴が驚いて話しかけた

「・・・百聞は一見にしかずってことで、ニュースを見てくれ鈴姉」華鈴の問いかけに一端に冷静になってテレビを指差す

「どれどれ・・・って・・・えっ！？えええええー！？」

華鈴も同じくして声をあげた

二人が驚愕したニュースの内容とは・・・「私、結城財閥社長、結城正治に一人息子がいます。その息子の彼女を募集しております。

もちろん、息子がいいというなら、一夫多妻も許可しております。」

「な？驚くだろ？」寛樹が冷静になって華鈴に聞く

「ううん・・・かなり驚いた・・・でもどうして？」華鈴も落ち着きを取り戻しつつある

「さあ？俺も何が何だかわかんねえよ・・・ん？メールだ・・・親父からだ」寛樹がケータイを取り出しメールを確認する

「寛樹へ、お前ももういいころだと思つて父さんが彼女を募集しておいたぞ。これを機にしっかりと女を作つて父さんに孫の顔を見せてくれよ。父さんより」

「・・・」正直もう突っ込む気すら起きてこない寛樹

「あらあら、寛樹ちゃん大変なことになってるわね」買い物から帰つてきた華恋がリビングの入ってくる

「お兄ちゃん大丈夫？」朱里が駆け寄ってくる

「お兄ちゃん・・・」雛里は寛樹にギュッと抱きつく

「パパもずいぶん凄いことするね」梓がソファに座り寛樹の横に近づく

「ん・・・電話だ、はるかから？」電話に出る

「もしもし、私はあるかだけど。ど．．．どうなってるの!？」かなり混乱している

「はあ．．．まず落ち着け」寛樹がため息をついてはるかをなだめる
「すう〜はあ〜．．．よし、落ち着いた．．．で、どういうこと!？」

「こつちが聞きたいくらいだ．．．」かなり、落胆している

「兄さんの彼女を募集なんて．．．」

「とりあえず、家に来い。小百合も呼ぶから」

「うん、わかった。じゃあね」ケータイを切り、小百合に電話をかける

「もしもし．．．寛樹ちゃん?どういことあのニュース?」落ち着いてはいるけど、混乱している小百合

「そのことについて、話したいから家に来てくれないか?」

「うん、わかった。すぐに行くね．．．」ケータイを切る

ガチャ．．．

「おじゃまします!兄さん!」はるかがリビングに飛び込んでくる

「はるか、外はどうだった?」

「マスコミや野次馬がいっぱいいたよ。私も裏口から入ってきたけど．．．」

ガチャ．．．

「おじゃまします．．．寛樹ちゃん、外テレビ局がかなり来てるよ」小百合が静かに入ってくる

「恋姉、しばらくケーキ屋は、休みにしたほうがいいと思うけど?」

「そうね．．．この騒ぎじゃとてもじゃないけど、あけてられないわね」

「ねえ!テレビを見て」華鈴がテレビを指さす

「えー!ー私は、結城社長のご自宅に来ています。どうやら、今日はケーキシヨップ「スイートキャッツ」は御休みのようです。この、自宅にいる息子さんに話を伺いたいと思っていますんですけど、まだ姿を見せていません。姿を見せたらまた、連絡します。」

「おいおい、いまさら俺になにを聞く気だ？」

「……」「全員が一斉に鎮まる

「……一つ打開策が出来たけど、聞くか？」寛樹が全員に聞く

「うん」「一斉にうなづく

「親父に電話して、マスコミやパパラッチを遠ざける」

「確かにそれが一番かもね……」華恋がうなづく同意する

「でも、それでマスコミやパパラッチはいなくなるの？」「華鈴が心配になり聞く

「そこは、財力の出番だな……あんまり使いたくないけど」

「そうだね……」朱里が同意する

「さっそく親父に電話してみる」寛樹がケータイを取り出し電話する

「親父、頼みがある」

「なんだ、さっそく彼女とのデート費用か？」笑いながら聞く

「そんなんじゃないよ！今すぐにマスコミとパパラッチをとっざけてくれ」

「うん？どういうことか詳しく話さない」急に真面目そうな声に変わる

「じつは……ってことでかなり迷惑してる」事情を詳しく話す

「そうか……そんなことが、起きているのか……わかった。今すぐにかたづけよう。しかし、女は作るんだぞ？」

「……それくらいなら、聞いてやる……だけだ」

「わかっている。政略結婚なんてさせないさ。もちろん娘たちもな」

「ありがとう、親父」

「うむ。じゃあな」電話を切ったその瞬間、ニュースが始まる

「えーっ！先ほど、紹介した結城社長から「息子や娘の私生活に支障をきたした者は容赦しない」とのことです」

「見て、マスコミやパパラッチが次々に帰って行くよ」はるかが窓を指差して話す

「これで……皆静かに……」寛樹が急に真剣な顔つきになる

「どうしたの？」雛里が寛樹に更にくつつく

「・・・まだ、パパラッチがいる。はるか、頼みがある」はるかに耳打ちをする

「りよかい。任せてよ兄さん」はるかがリビングから裏口にむかう
「うーんと・・・あっ！いたいた」パパラッチに近づきケータイで写真を撮り戻ってくる

「行ってきたよ。兄さん」データを寛樹のケータイに送る

「これをこうして・・・」父親にメールを送る

「あっ、返事が返ってきた。何々、「了解した」か」

次の瞬間、パパラッチの顔が真っ青になりあわてて逃げだした

「恋姉、店を開けても大丈夫だよ。俺は、厨房の方にいるから」

「そうね。さあみんなお店を開けるわよ」華恋が全員に催促をかける

それから、しばらくして完全にこのことに対してのニュースは完全に消えた

「親父の力って・・・」

第3章 学園のコンテスト（前書き）

俺の通っている「刻泉学園」にはバカ スミたいな召喚システムがある。まあ、べつにいいか

月に一度開かれている「ミス刻泉コンテスト」があるんだが、まあ、普通のミスコンと同じなんだけどこの学園はちよつとというか、かなり違っていた・・・

「ルールは、皆さん知っての通り。試験召還バトルで相手からポイントを横取り可能です」

そう・・・この学園は、ポイントの横取りが可能なのだ・・・男子生徒が入れた表をバトルで奪うそれが、この学園のミスコン

「今回の優勝賞品は結城寛樹くんに行く遊園地の一日無料券です」

「なにいい!？」俺が驚くのより早く全学園中の女子生徒の喜びの方が早かった

「まさかと思うが親父の差し金だよ・・・」

第3章 学園のコンテスト

親父のテレビ会見から数カ月が過ぎた・・・

「・・・なんか久しぶりに、学園に来たな」校舎の前で物思いにふけている

「オッス！寛樹」いかにも体育会系です。と言いたげな格好で来たこいつは、崎本雄二

「よお。雄二」俺もとりあえず挨拶を返す

「おはよう。二人とも」駆け寄ってきたのが、皆村愛理。帰国子女でなぜか俺と面識があるから驚きだ

「おはよ。愛理」「オッス。皆村」

「なんだ、いつものメンバーの勢ぞろいか？」笑いながら来たのが、大神響也

「まだ、いないだろ？」適当に返す

「おはよ〜兄さん」はるかが走ってくる

「おはよう。寛樹ちゃん」小百合がバスから降りて歩いてくる

「おはよ〜皆」こののほほんとしているのが穂坂夕菜

「・・・あつ・・・おはよ・・・」このツンデレは手塚咲

これが、いつものメンバーなんだよな・・・まあ、たまに恋姉や鈴姉、朱里に雛里、梓もいるんだけど

「それより、寛樹聞いたか？」雄二が突然聞く

「ああ、聞いた・・・全く迷惑な話だ」

「ああ。あの話ね。確かに寛樹にしてみれば迷惑だな」響也が同意をしてくる

「でも、女の子からしてみれば、かなり嬉しい話だよ」愛理が女子側で意見を言う

「・・・俺の承認なしで決まった話だぜ？」

「えっ！？寛樹くん公認じゃないの？」驚いたような顔で聞く

「公認なんてしねよ・・・勝手に決まったんだよ。」

「でも、凄いやね〜遊園地無料券なんて」夕菜がほえ〜としながら言う

「・・・確かに、この学園がそんなもの出すとは思わない」咲が考え込む

「っ!？別に・・・あなたのために考えてるんじゃないからね!」

「わかつてる・・・てか、考えるだけ無駄だ。数ヶ月前のニュースがそれを物語ってる」

「数ヶ月前のニュース?」はるかとお百合以外がきよんとしている

「・・・あつ!思い出した、寛樹くんの恋人募集・・・あれのこと?」愛理が寛樹に聞く

「十中八九あたりだ・・・親父だよ。たぶん貸し切りになかったのは背後にいるってことを隠したかったからだと思う」

「なるほど・・・」全員が理解したようにうなずく
「まさか、お前らわかってなかったのか?」

「・・・」まさかの全員無言
「はあ・・・まあ、いいか。それよりミスコンって」

「確か、中高大学に通う女子生徒全員が対象で男子生徒も全員投票が決まりだね」

「寛樹は誰に入れた?」響也が興味本位で聞いてくる
「面倒だからパス」さらりと答える

「そっか。雄二は?」
「・・・聞くまでもないだろ?」雄二がやれやれといった感じで答える

「てか、入れなきゃお前・・・」
「ああ・・・間違いなく・・・」

雄二がこんなけびびっているのは、雄二の幼馴染の青山翔子に結婚を迫られているためだったりする

「そっいう、響也は?」雄二が無理やり話題を変える

「俺はもちろん、結城家長女の華恋さんに決まってる」満足げな顔

をしよう

そういえば、こいつは恋姉のファンクラブ会長だったけ・・・

「ミスコンって言えばだけど、聞いた？ミスターコンってのがあるらしいよ」はるかが話題を変える

「男子生徒のやつだよな？はるかちゃん」小百合が聞く

「うん、ミスコンと同時期にやってるんだって。それで、途中結果が出てるんだけどダントツ一位がパ・・・兄さんなんだよ」

「はるか・・・（今、さり気んにパパって言いかけたる？）」

「（うっ！ごめんさ〜いパパ。今度は注意するね）」

「どうした？」雄二が不思議に思う

「いや、なんでもない」平然と返す

「んで、俺らの優勝賞品は何なんだ？」雄二がはるかに聞く

「んと・・・ミスコン一位と一日デートだって」

「・・・間違いない親父（結城の親父さん）の仕業だな（ね）」
全員が声をそろえて言った

「・・・ホントに俺を誰かとくっつけたいのか・・・」ため息を吐いて椅子に座る

「」（寛樹くん寛樹ちゃん、寛樹）は恋愛に興味はない（のかしら、のかな、の）？」
「愛理に小百合、咲が不思議に思った
チャイムが鳴った

「昼か、てか一日自習って」

「あ、あの結城君！」
「クラス中いや学園中の女子生徒が集まってきた

「一緒にお昼しませんか？」
「全員が手作りらしい弁当を差し出す
・・・」無言でするしていく

「あ、あのクールさがたまらないわ」
女子生徒が教室から出ていく
寛樹を見つめている

「あのヤロー・・・全学年で同盟組んでいつか殺る」
「クラス中の男子生徒を敵に回した瞬間だった

「お兄ちゃんお待たせ。いこっ？」
朱里と雛里が迎えに来た

「ああ、わかった。行くぞ、皆」教室を出ていく
「おうよ」雄二も自分の弁当を持っていく
「ああ〜華恋さんにまた会える」響也がうかれながら行く
「相変わらず、凄い人気ね寛樹くん」愛理が寛樹の後ろに続く
「わ〜い おべんと、おべんと」夕菜が妙な歌を歌いながら寛樹に
続く

「・・・」咲が静かに出ていく

「あはは・・・（誰が私のママになるのかわかんないな〜）」

「寛樹ちゃん大変そう・・・」はるかとお百合も続く

一方・・・

「もしもし、これは結城学園長どうしましたか？」校長が電話をしている

「うむ、どうかなミスコンとミスターコンの結果は？」

「はい、ミスコンはまだ分かりませんが、ミスターコンは寛樹くんに間違いありません」

「そうか。わかった・・・では、失礼するよ。」

「はい、わかりました。」電話を切る

一方・・・

「あつ！姉さん来たよ」華鈴が寛樹たちを見つける

今、華恋たちがいるのは一部の生徒しか入れない食堂の小部屋にいる

「相変わらず、寛は他の子を無視してるし」

「ふふっ、ホントに相変わらずよね。」

「恋姉、お待たせ」個室に入る

なんやかんやで皆で昼食を取る

それから、数時間後・・・

「結城華恋さんに英語で申し込みます」

「いいわよ。先生許可を」

「承認します」

「サモンっ」「お互いに召喚獣を出して戦う

英語 結城華恋 175点VS100点 田中美紀

いたるところから、召喚獣を呼ぶ声が聞こえてくる

「始まったな、点の奪い合い」教室でのんびりしていると・・・

「我々、結城討伐組合は、結城寛樹に対して試験召還戦争を申し込めます」

「・・・面倒だが、受けてやる。雄二、響也、愛理、はるか、小百合、夕菜、咲手伝ってくれるな？」

「おう」

「勝ったら、華恋さんの手作り弁当食べさせるよな？」

「うん、任せて」

「兄さんの力になるよ」

「うん、頑張るね」

「ほえ〜頑張るね」

「い、いいけどあんたのために頑張るんじゃないからね！」

「お兄ちゃん！私たちも」

「手伝う・・・」朱里と雛里が前の扉から入ってくる

「お兄ちゃん、私も」梓も遅れて入ってくる

「文句はないな？」組合のリーダーらしき人物に聞く

「ああ。開戦は明日の午後14時ちょうどだ」

「いいだろう・・・こっちは後二人戦力を入れる」

こうして、結城（12人）VS結城討伐組合（およそ500人）による大規模な戦争が始まる

「まったく、あいつら、完全に俺を妬んでるだけじゃないか・・・」

第4章 試験召還戦争 前編（前書き）

昨日、挑まれた試召戦争。相手は約500人、対するこっちは、わずかに12人・・・絶望的な状況だけど負ける気はしなかった。

なぜなら、成績優秀な恋姉と意外と勉強ができる鈴姉がいるから。そして、なぜか知らないが血を受け継いでいるのかわからないが朱里と雛里は中等部では常にトップいる成績だったりする

梓は平凡的な学力だが、それでも高い方なのだ

「なんか、凄い姉妹だな・・・」

かく言う俺は授業に出てもいないし、小中高と行ってもいないの成績はなぜかベスト3に入る勢い

「親父に帝王学を叩き込まれたからな・・・」

他のメンバーは、良くもなければ悪くもないといったところで対して負ける要素がない

ただ、相手が何か戦略を起していないければ話だが・・・

第4章 試験召還戦争 前編

「さてと、あいつらがどんな手で来るか・・・」

食堂の個室でフリーフィングをやっている10名

「そういえば、お姉ちゃんたちは？」梓が紅茶をすすりながら聞く
「さつき、電話したら鈴姉はすぐ来るって言った。恋姉は戦闘中
みたいで繋がらなかったからメールをしておいた」アイスコーヒー
を飲む

「なあ、寛樹どうするつもりだ？明らかに相手の方が人数は、多い
ぞ？」

雄二が真剣な顔付きで話し始める

「ああ。そうだな・・・人数はこっちが不利だが成績はこっちが有
利・・・」

紙になにやら書きながらぶつぶつ言って作戦をまとめていく

「・・・こういう時の寛樹くんってかなり凄い速さで頭が回転する
わよね。」

愛理が関心しながら寛樹を見つめる

「うん・・・私も正直驚いてるよ・・・」

さすがの幼馴染の小百合も驚いている

「こういう時はホントに寛樹の頭の回転がうらやましいと思っぜ」
響也も感心して見ている

「おなかすいたあゝ。ねえねえ愛理ちゃん、何か食べていいかな？」

愛理に小声で耳打ちする

「もおゝしょうがないわね。はいこれ、私のパフェだけ食べてい
いから。ね。」

自分の食べていたパフェを差し出す

「わあゝい。ありがと、愛理ちゃん大好きだよ」

差し出されたパフェを喜んで食べ始める

「・・・(さすが、パパだね。パパのそういうところが大好きなん

「だけどね」

「・・・朱里、ここはこれでやってくれるか？」

「作戦がだいぶ頭の中で固まってきたのか相談を始める

「うんと・・・うん、大丈夫だよ。」

「じゃあ、頼むぞ。」

「ポンポンと頭をなでる

「えへへ・・・頑張るね」

「・・・雛里、こっちはお前に任せるけど大丈夫か？」

「うんと・・・大丈夫だと思うけど・・・一人援護がほしいかな」

「・・・愛理を向かわせるのでどうだ？」

「・・・大丈夫。二人なら抑えきれよ」

「なら、頼むぞ。愛理もな」

「同じくポンポンと頭をなでる

「えへへ・・・頑張りましゅ！？ひつく・・・噛んじゃった」

「うつむいて赤面する

「ええ、任せて」

「梓は、遊撃隊だ」

「わかった。でも遊撃隊は私一人じゃないでしょ？」

「ああ、雄二と小百合にもやってもらうが二人ともいけるな？」

「おう！任せろ」

「力強くガッツポーズする

「うん。任せて」

「うなづく

「夕菜は、補給部隊だ」

「ほえ？補給部隊ってなにをするの？」

「パフェを食べ終えて満足げな顔をしている

「・・・補給部隊は、その名前のとおり点数の減った味方に自分の

「点数を渡す役割だ」

「ほえくなるほど。皆のお医者さんだね？」

「まあ、ニュアンスは間違っていないか・・・」

「わかったよ〜任せて」
「ごめんね、次から次えてと相手が来たからね。でも、寛樹ちゃん
ナイスタイミングで試召戦争申し込まれたわね」
華恋と華鈴が遅れて入ってくる
そう、試召戦争に出ている間は、戦争相手以外攻撃してはいけない
というルールがあるのだ
「で。寛、あたしと姉さんの役割は？」
「恋姉ははるか俺の護衛をしてくれ。もっとも、護衛はいらない
んだけどな」
「わかったよー。兄さん」
「うふふ、わかったわ」
「んで、恋姉は突撃部隊をやってほしんだけど？」
「ん〜、条件次第かな？」
「条件は？」
「一週間、私と一緒に寝るこ・・・」
「・・・別の役割を考えよう」
華鈴が言い終わる前に役割を変え始める
「ちよつと!? まだ、言い終わってないわよ？」
いきなり無視されて驚きを隠せない
「・・・(凄い危機回避能力・・・)」
「結城家以外のメンバー関心していた」
「よし、雄二突撃隊に回ってくれないか？」
「まあ、いいけどよ。華鈴さんはどうするんだ？」
華鈴のほうに目を向ける
「鈴姉には、俺周辺の敵をかたずけてもらっさ」
「鈴姉もこれなら、いいよな？」
「しょうがないわね。わかったわよ」
渋々納得する
「よしっ。これで終わり・・・皆帰るぞ」
「は〜い」

一斉に立ち上がり帰宅する

一方・・・

「どうする？相手は成績ベスト3に学園トップが3人だぞ？」

「決まってる。真っ向からあたったところでこっちに勝ち目はない。だからこそ、多人数戦法を使うことにする」

「なるほど。それなら、点の低さをカバー出来るな」

「と何やら10人で密談している

「他の奴にどういう作戦名で言う？」

「作戦名は、神風特攻隊だ」

「「おー！」」

「でもそれ、死ねることだよね？」

「作戦の趣旨を話してからこの作戦名を言えば大丈夫だ」

「よし。なら、神風特攻隊の選抜を決めるか」

数時間話し合い・・・

「では、我々の勝利に乾杯」

「「乾杯」」

ジュースの入ったコップで乾杯する

いよいよ、明日試召戦争の火蓋が切って落とされる

「・・・ホントに何考えてんだ？」

第5章 試験召喚戦争 中編（前書き）

昨日は、作戦会議（つと行っても俺が考えるだけだが）で終わったが、やはり数の差は否めない・・・
おそらく、相手は数にものを言わせて特攻してくるだろうなら、逆にそれを利用するまでだ

いよいよ学園始まって以来の大戦争が始まる・・・

第5章 試験召喚戦争 中編

「……なあ、寛樹どうするつもりだ？」

雄二が帰り道に聞いてくる

「……どうするって？」

「試召戦争だよ」

「ああ、勝つだけださ」

「単純だな」

笑いながら話す

「まあな。相手は数だけの烏合の衆だ」

「だが、数はこっちの数十倍だぜ」

「ああ、それだけは、さすがに困ってるよ」

「……雄二、浮気はするさない」

バチバチとスタンガンの音がする

「しよ、翔子！？ってぐわああ」

スタンガンを当てられて気絶する

「相変わらずだな……翔子その辺にしておいてやれ」

「……寛樹、噂は聞いた」

雄二を引きずるのをやめて寛樹と話し込む

「噂？」

「……試召戦争のこと」

「ああ、そのことか……でもどうして？」

「……雄二が協力してるから、私も協力する」

「……そうか、ありがとなら、雄二と同じ仕事を頼むぞ」

「……うん。わかった。それじゃ」

雄二を引きずって帰る

「……雄二必ず生きて帰ってこいよ」

一方……

「明日、結城寛樹に勝てれば俺たちは……」

「モテモテだぁー！」「
なんかわけのわからないことを言っている組合の連中
一方……」

「……今日の晩飯はつと……ん、メール？恋姉から……何々
『晩ご飯はオムライスがいい』か……ん、またメール？今度は鈴
姉からだ、何々『夕飯はカルボナーラにちなさい』って……まさ
か……メールだ……今度は朱里か……『お夕飯はハンバーグ
でお願いね？』メール……離里か……ナポリタンが食べたい
……』『……メール、梓か『カレーがいいなお兄ちゃん？』……
全員バラバラかよ……はぁ……んじゃ、全員の希望をかなえて
やるか」

メールを見て、うなだれた後、買い物に向かう

「ん、はるかじゃないか」

ばったりはるかにあう

「あつ！パパ！！」

寛樹を見つけた瞬間勢いよく胸に飛び込む

「つたく、……まあ、いいか。悪い気はしないから」

「えへへ〜パパ。」

なぜ、はるかが俺をパパと呼ぶかと言うと……

それはまた今度話すでしょう

「はるかは、何してたんだ？」

「ん〜とね、晩ご飯どうしようかな〜って考えながら歩いてたらパ
パを見つけたの」

「……お前さあ、料理出来るんだからやれよ」

「え〜。パパのところに御馳走になるう〜」

「お前に彼氏が出来た時、どうする気だ？」

「彼氏なんていらぬもん ずっとパパとママと暮らすから」

「はぁ……まあ、今のうちはいいか」

「パパあ〜あだし、パパのカレーが食べたいなあ〜？」

「カレーは確か……梓が食べたいって言ってたからちようどつく

るかな」

「やった〜 パパのカレー、パパのカレー」

おおはしゃぎのはるか

「ふっ……（俺の娘か……）」

いよいよ明日、試験召還戦争が開幕する

「……前日がこんなんで大丈夫かな？」

第6章 試験召還戦争 後編(前書き)

いよいよ・・・明日は学園始まって以来の大規模な試験召還戦争・
・前学園中の男子生徒VS寛樹を含めて14名の戦争。

戦力は明らかにこちらが不利だが、相手はただの烏合の衆であるけど全員が俺を狙ってるということだけが利害一致している

「まったくハタ迷惑な話だが・・・」

今日一日はまあ、姉さんや妹たちのわがままをきいてやるか・・・

第6章 試験召還戦争 後編

「皆〜ご飯よ」 寛樹の手伝いをしていた華恋が姉妹達を呼ぶ

「・・・（今日だけ・・・疲れた・・・）」 無言のため息をつく寛樹

「うあわ〜すつつつ〜い。全員が別々の料理だ〜。あつ！私が食べたかったものがある」 華鈴が感想を言っている

「お兄ちゃん。お疲れ様」

「・・・お疲れ様」 朱里と雛里は寛樹を労ねぎらっている

「お兄ちゃん。まさか、私たちのわがママを全部聞いてくれたの？」

梓が驚き聞く

「まあな。今日だけな」 頭をかきながら答える

「おじやましま〜す」 はるかがリビングに入ってくる

「あれ？はるかちゃんどうしたの？」 華恋がはるかに聞く

「えっと・・・商店街を歩いてら兄さんにあつてそれで晩ご飯を御馳走になりきたの。」 はるかが自分の分のカレーを盛りつけながら話す

「いいんじゃないの？食事は多い方が楽しいし。ね？」 華鈴が華恋に聞く

「そうね・・・皆でいたただきましよう」

全員が席に着き夕飯を食べ始める

数時間後・・・

「・・・籠城戦じゃこつちが不利だから・・・やはり、攻め出るしかないか・・・」 明日のため再び作戦を立て始める寛樹

「・・・明日は一日中狙われなくて済むわね」 華恋が肌の手入れをしながら華鈴に聞く

「そうだね〜・・・でも、初見召還バトルは変わらないけどね」 爪

の手入れをしながら聞く

「雛里ちゃん、明日は頑張ろうね？」

「うん。朱里ちゃん」明日に備えて早く寝る二人

「・・・お兄ちゃんは、大丈夫って言ってたけど・・・やっぱり、苦しいよね。よし！頑張ろう！」

梓は勉強を始める

「パパはこういことやってたんだね・・・あたしのママが誰になるかまだわからないな」

「・・・はるかには誰がいいんだ？って生まれてくる娘に聞くことでもないか」

「えへへ。そうだよ。パパ。あたしはパパが好きになった人がママでいいからね」寛樹に抱っこされながら話す

「そういえば、パパってこの家の本当の子供じゃないんでしょ？」突然はるかが話を変えて聞く

「ああ・・・でも、どこでその話を？」

「おじいちゃんがおばあちゃんと話してたの聞いたの」

「親父か・・・」

「ねえ？パ〜パ〜話だよ。この家に来ることになった理由を」

「・・・まあ、いいか。それはな・・・」

「俺ははるかに自分が孤児だったことを話始めた」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9736v/>

シスターズパニック！？

2011年12月4日23時48分発行